



舎人親王の 即興歌

この歌は、元正太上天皇が山村（現在の奈良市山町付近）へ行幸して平城宮へ戻った際、「あしひきの



訳

あしひきの山に行きけむ
山人の心も知らず山人や誰

山に行かれたとおつしやる山人のお心は、私にはわかりません。お会いになったという山人とは、いったい誰のことでしょうか。

舎人親王 卷二十(四二九四番歌)

山行きしかば山人の我に得しめし山づとそこれ（山へ行った時に山人が私にくれたおみやげですよ、これは）という歌（四二九三番歌）を口ずさみ、これに應える歌を詠むよう臣下たちへ命じたのに対し、その場にいた舎人親王が即座に應えて返した歌です。山の枕詞「あしひきの」をそのまま用い、元の歌で三回使われている「山」の語句を同じく三回使って返しており、当意即妙な歌の掛け合いの様子が読み取れます。また、「山人」とは山に住む仙人のことで、元正太上天皇が「山に行つて仙人に会つてきましたよ」と歌ったのに対し、舎人親王は「仙人とは誰ですか」と返しています。これは、太上天皇の住まいを「仙洞」（元来の意味は仙人の住居）と呼ぶのを踏まえた言葉遊びで、舎人親王は「仙人というのは仙洞に住む貴方のことではないで

すか」と元正太上天皇をからかっているのです。こうした微笑ましい歌のやりとりから、両者の仲の良さがうかがえます。

舎人親王は天武天皇の九人目に生まれた皇子で、元正太上天皇にとつては叔父に当たります。天平七（七三五）年に亡くなるまで、皇族の重鎮として代々の天皇を支え、養老四（七二〇）年には『日本書紀』を完成に導いた功績でも知られます。そうした高貴な身分にありながら、賞品や賞金によって「心の著く所無き歌」（意味の通じない歌）を募集するなど（『万葉集』巻十六・三八三八、三八三九番歌）、戯れ歌や即興的な歌を好む側面も持ちあわせていたようです。そのような舎人親王の歌の好みが、今回取り上げた歌にもよくあらわれていると言えるでしょう。

（本文 万葉文化館 竹内亮）

万葉ちゃんの つぶやき

和歌や作者などに関連するものを紹介するよ！



万葉ちゃん

舎人親王と 日本書紀

舎人親王を中心に編纂された『日本書紀』三十巻のうち、巻第十の「応神天皇紀」の部分の写本が奈良国立博物館に収蔵されています。これは『日本書紀』の現存最古の写本の一つです。



※通常、一般公開されていません。

所 奈良市登大路町50番地
館 奈良国立博物館
☎ 050-5542-8600